

「牡丹灯記」考

——その本邦受容に先立って——

太刀川 清*

本稿は「牡丹灯記」の受容の系譜(一)・(二)・(三)〔本紀要42・43・44号〕および「怪談牡丹灯籠」(ア・ウエルボウ 30号)に先立つものである。

—

「牡丹灯記」はいうまでもなく、明の瞿佑の作『剪灯新話』(以下単に『新話』という)の一篇である。

その『新話』を「東洋の古典の世界の空にかがやいているあやしきうつくしい一顆の星である」と言ったのは、村上知^(注1)行氏であるがその村上氏は、そこで田汝成の『西湖遊覧志余』の『新話』の評をつぎのように訳して紹介していた。

閨情を粉飾し冥報に仮託す、はなしは妖麗であってたわむれの筆のすさびとはいえ、それでもその中におしえがあり採るべきところがある。

と、つまりは『新話』が艶情文学であり冥府文学でありながら「勸百諷」と言って、それなりに教誡するところがあると言うのである。村上氏はそこを余り評価されないようであるが、『新話』が単に男女の艶情や冥府の妖しい物語だけではなかったとい

うことについては改めて考えてみる必要があるであろう。

『西湖遊覧志余』がそう言うのも作者の瞿佑自身が『新話』の序で「余が此ノ編、世教民彝ニ於テ之ヲ補ヒアルコト莫シト雖モ、善ヲ勸メ悪ヲ懲シ、窮スルヲ哀シミ屈スルヲ悼ムコトハ、其レ亦言フ者罪無ク聞ク者ヲ以テ之ヲ戒ムルニ足ルノ一義ニ庶カラン」(原漢文、以下訓み下して記す)と叙し、友人ノ吳植も序で「其レ則チ子氏之寓言ナリ」と、また彝雲翰も「是ノ編ハ稗官之流ト雖モ、而モ善ヲ勸メ悪ヲ懲シ、ヤヤモスレバ鑒戒ヲ存ス」と叙すあたりに依拠するものであろうが、そうなると田汝成ならずとも『新話』には教誡諷世の意があると見なければなるまい。ならば、『新話』の二〇篇の奈辺にそれがあるか、ということになるが、まずは当面の「牡丹灯記」ではどうであったか。

「牡丹灯記」はいわゆる幽冥交婚の物語である。物語は展開の上で二分される。すなわち喬生という男が妻を亡くしてやもめ暮しの佗びしさから、元宵に知った麗卿という女に狎れ親しむ。しかしこれが幽鬼であると知って避けた喬生の薄情を怨んだ麗卿の

怨念によってとり殺される。これが前半である。つづいて曇り空の昼。月のかげった夜には、牡丹灯を挑げた侍女金蓮に前導された喬生と麗卿の姿が巷で見かけられたが、これと行き会う者は重病に罹る。恐れた人々は鉄冠道人に幽鬼の調伏を哀訴する。その結果三者は地獄に送られることになった。これが物語の後半である。

つまり物語の前半は艶情物語（恋愛物語）であり後半は地獄物語（冥府物語）ということになる。件の「勸百諷一」が「牡丹灯記」にもあるとすれば、それは明らかに後半の冥府物語でなければならぬ。

ところでその後半の庄巻は道人の前に引き出された喬生、麗卿、金蓮の三者の供述であり、それに対する道人の判詞である。供述はまず喬生である。妻を失いやもめ暮しから孔子の色に在りの戒めを忘れて、女に狎れ親しんだことを「事既ニ追フコト莫シ悔トモ将タ奚カ及バン」と、悔んでも及ぶものではないと反省する。麗卿も、若くして世を去り、身は朽ちても霊は滅びない。そのため五百年の歡喜冤家は人の語り草になってしまい「迷ヒヲ返ルヲ知ラズ安ゾ逃ルベキ」と、今更に罪を逃れることも出来ない後悔するのである。しかるに金蓮の供述には反省もなければ後悔もない。本来竹を骨として色紙をもって貼りなした人形であるが、顔も身も人に似て名前まである。人の像として作られたものは、敢て妖をなさずとも人のごとく行動する怪異を示してもよいではないか。「精霊之異ニ乏シカルベキ因テ計ヲ得タリ、敢テ妖ヲナサンヤ」と、自らの精霊としての存在を譲ろうとしないところは喬生、麗卿と異なるところである。

これに対する道人の判詞は「喬家ノ子生キテ猶ヲ悟ラズ死ストモ何ゾ恤マン、符氏ノ女（麗卿）死シテ尚ヲ貪姪生ト知リヌベ

シ」と、喬生の淫欲も麗卿の淫逸も殊更に弾劾するところではない。それぞれの淫行を戒めるだけでは果たして教誡となり、飄世の対象になり得ようか。それが可能なら世の艶情文学の多くがそれに類することになり、これにはさして意味がなさそうである。ならばことは金蓮に係わることになる。

道人は金蓮の供述に対して「況シヤ金蓮ガ怪誕盟器ヲ仮リテ以テ矯誣シ世ヲ惑シ民ヲ誣テ条ニ違ヒ法ヲ犯ス」とその判詞は手厳しい。金蓮のごときものが盟器を仮りて世を惑し民を誣すのは条理を逸脱して違法も甚しいと、痛烈に批判し弾劾するのである。かつて近藤春雄氏は、「牡丹灯記」の一篇を『新話』の他の艶情物語と比較して異色あるものとした。それはこの種の物語は本来団円に終わるはずのもので、喬生が麗卿の棺の中で死ぬのはまさに愛情の達成と言うべきである。だから仲よく手を携いて歩くようになった。ところがそのあと道人を登場させてそれを邪惡なもの、人を害するものとして九幽の獄におしこめてしまったというところが他と異なるところであると指摘した。つまり本来艶情物語であるべきものを一挙に邪惡糾弾の物語に変えてしまったと言うのである。近藤氏はその異色性を麗卿の存在に委ねて、これを邪穢なものとしたところに教誡の意をもとめたが、先述のことから金蓮こそ糾弾されなければならず、飄世の対象となるものではなかったか。「牡丹灯記」では金蓮の存在こそ重要である。

二

「金蓮」とは別に纏足の美称である。^(注3)「金蓮歩」と云って美人の艶麗な歩みを形容する語でもある。それを以て名付けられたこのY鬟の少女が果たす「牡丹灯記」での役割とは、まず、

十五夜三更尽テ遊人漸ク稀ナリ 一Y鬟ヲ見ル双頭ノ牡丹灯ヲ挑ゲ

テ前導ス 一美人後ニ随フ

と、金蓮は牡丹灯を挑げて麗卿を前導して喬生と邂逅させて、二人を逢う瀬へと導く。その金蓮は「妾が一身遂ニ金蓮ト湖西ニ僑居スル」と、いつも麗卿と共にあることを明らかにする。

つぎに喬生はその湖西に麗卿を訪ねるが居所がわからず、その帰途湖心寺で麗卿の旅櫛を見つけて驚くが、こゝではそれより背中に金蓮とある盟器婢子を見た喬生の恐懼こそが重大で、これには双頭牡丹灯も付属しているのである。

廊ノ尽ル処一暗室ヲ得 則チ旅櫛有リ 白紙其ノ上ニ題シテ曰ク
故ノ奉化符州判女麗卿之櫛 柩前ニ「双頭ノ牡丹灯ヲ懸ケ灯下ニ」
盟器婢子立ツ 背上ニ二字有リ金蓮ト曰フ 生之ヲ見テ毛髪大ニ尽
リ堅ケ寒栗体ニ遍シ

とあるところで、この「双頭牡丹灯」と「盟器婢子」の取り合わせこそ、物語の怪談としての重要な趣向であるだけではなく、諷世の対象たる金蓮との係わりの上で大切なモチーフである。

つぎは喬生が衣繡橋の友人を訪ねた帰途、湖心寺の門前を通ったところを「娘子久シク待ツ何ゾ一向薄情是ノ如クナル」と、喬生を寺中に引き入れるのも金蓮である。そしてこの後、「雲陰ノ昼月黒ノ宵往往ニ生ト女ト手ヲ携テ同ジク行キ 一Y簪双頭ノ牡丹灯ヲ挑ゲテ前導スル」。かくして人々に禍を与える、それを前導するのが双頭牡丹灯を挑げた金蓮であったのである。すると「牡丹灯記」の怪事のすべては金蓮の誘導するものとなり。この「精霊之異ニ乏シカルベキ」と主張する金蓮の存在こそ、道人の「世ヲ惑シ民ヲ誣ス」ものであったということになる。

三

なぜ盟器婢子の金蓮が「世ヲ惑シ民的誣ス」ものであるのか。

「牡丹灯記」が淫祠妖廟信仰と関係あるうとする高田衛氏^(注4)の所説はここでは示唆的である。高田氏はこう言う。

私たちは想像もつかないことだが、十五、十七世紀にかけて、浙江省一帯では民間巫覡の徒が各地の祠廟を拠点としてかなり広くはびこっていたらしいのである。彼等の民俗信仰の根拠となつたのは、『鄞県志』(特に『康熙鄞県志』)によれば、各地の祠廟の「妖像」「木偶」「土偶」に対する俗信の類があつた。それが女性を中心に、風俗褻乱に結びつくことが多かつたし、疫病流行の理由づけになることも少なくなかつたらしい。

「牡丹灯記」の話の中心は実は金蓮と名づけられて生命ある存在となつた「冥器婢子」(侍女の人形、死者への副葬品)の怪異であつたのである。それは十五、十七世紀の明州付近の「淫祠妖廟」信仰とただちに関連するかと思われる。

【康熙】鄞県志 卷九には、康熙二十年(一六八一)頃に、同じ明州で「牡丹灯記」と同様な事件が発生し、時の侯守が「四廟」を破壊した記事がある。いづれ詳しく紹介しなければなるまいと思つてゐるけれども、このようなケースから考えるなら「牡丹灯記」の怪談はたんなる虚譚ではなく、当時実際に行われた湖心寺をめぐる一風説をそのまま小説にしたものである可能性は強い。

高田氏の言うところから従つてこれを敷衍すれば、沢田瑞穂氏^(注5)の「土偶通姦」の話のひとつひとつが問題になる。個々の例は控えるが偶像はたとえそれが生命のない木石土偶であっても、人の姿に似せて作られるなら、やがて人間のごとく行動し、ついには妖異をなすものと考えられていたようである。金蓮の「面目機発人ニ比スルニ鉢ヲ具ヘテ微ナリ 既ニ名字之称アリテ精霊之異乏シカルベカラン」というところである。寺廟叢祠の泥塑女神や壁画女神が、人間の女性よろしく男に通い淫行を働く場合、あるいはまた男神の偶像が民間の婦女子に通う話も多く残していたようである。そしてかかる事態を冒瀆すれば災禍を蒙り、甚しきは死に

至る場合もあったことを、それらの話は伝えてある。沢田氏はまた、その神威の俗説を逆用して密通を重ねる男女の例、強喝を働く例などもあげているが、かかる不埒の者が出るに及んでは、世に広まって風俗壊乱の悪弊となることは当然のことではなかったか。

ことは死者に副葬する盟器においても同じことであつた。

「牡丹灯記」の原型と思われる『北夢瑣言』のつぎの話など、盟器婢子の悪弊を明らかにしたものである。

唐文徳中。京官張。忘基名。高蘇台。子弟少年。時往人陸評事院。往來為一美人所悅。來往多時。心疑之。尋病瘖遇開元觀道士具守元。云有不祥之氣授以一符。果一盟器。婢子背書紅英。在空舍柱穴中。因焚之。其妖乃絶聞於割山甫。

この例はのちに『太平広記』巻三六六「張氏子」として引くところでもある。近藤氏はかつて「牡丹灯記」の原拠を常渚の『靈鬼志』所収の「王元之」とした。しかし『北夢瑣言』のこの話はより「牡丹灯記」に近いのでなからうか。男は美女に逢うことで瘦せ衰えて行く。道士に「不祥之氣」ありと戒められて符を授けられる。「紅英」と名付けられた盟器婢子。そしてそれを焼毀することとで男は禍を免れた。麗卿という亡女が存在を考えなければ、大凡は「牡丹灯記」の構想と一致する。「不祥之氣」は「牡丹灯記」に就けば、隣家の翁が喬生に言う「噫子禍アラン人ハ乃チ至盛之純陽、鬼ハ乃チ幽陰之邪穢、令子幽陰之魅ト同ジクイテ知ラズ、邪穢之物ト共ニ宿シテ悟ラズ、一旦真元耗尽シ火青來臨セン措カナ青春之年テ以テ遽ニ黄壤之客トナランヤ」となつて「幽陰之邪穢」となる。そしてこの幽婚に誘うのも盟器の所為であつたことを『北夢瑣言』のこの話は伝えて明らかにしている。したがってこの盟器こそ「況ンヤ金蓮之怪誕」として糾弾されなければ

ならず、「牡丹灯記」の諷世の拠りどころもこの盟器であつたのである。

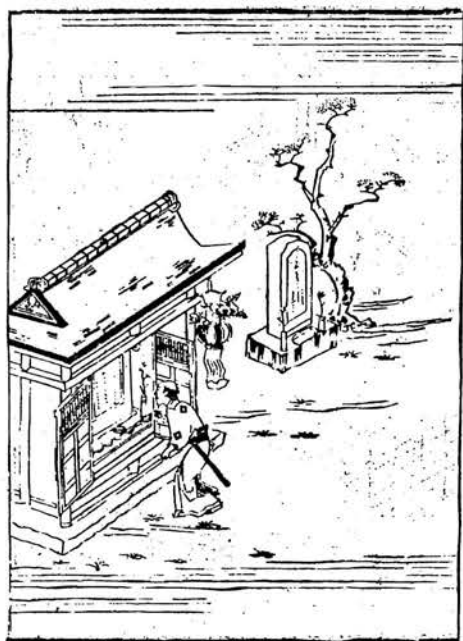
それにしても、諷世をもって「時を濟ふ」はずの『新話』が、怪異に仮託した事実無根の話、人心を惑乱するものであると禁書になるというのも皮肉なことであるが、これは後日のことである。^(注7)

四

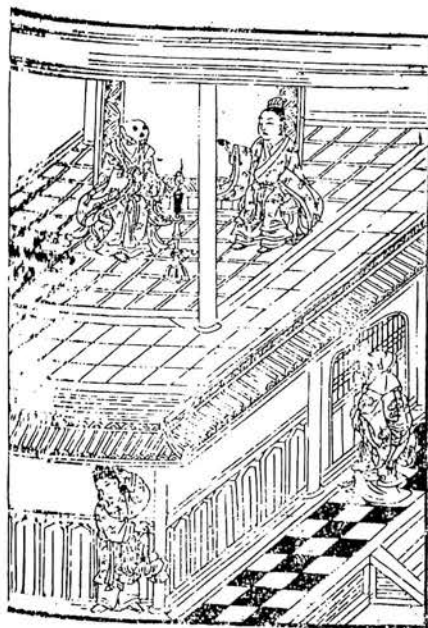
「牡丹灯記」の諷世の在りどころを盟器婢子の金蓮に託すことがあつたとしても、なお「双頭牡丹灯」との係わりが気になる。この両者のとり合わせが「牡丹灯記」の重要なモチーフであつたことは前述したが、就中「双頭牡丹灯」は「盟器婢子」を前導・誘導する存在として意味がある。近藤氏は『新話』所収の物語の題名の「記」「録」「志」「伝」の四種について考察し、「記」では人より話そのものに関心があり、奇異な事柄そのものが興味の中心であつたとする。すると「牡丹灯記」は「双頭牡丹灯」にまつわる怪事が中心であつたことになる。ちなみに「牡丹灯記」で牡丹灯が出るのはつぎの五ヶ所である。

- (1) Y 簀ヲ見ル 双頭ノ牡丹灯ヲ挑ゲテ前導ス 一美人後ニ随ウ
- (2) 即チY 簀ヲ呼ビテ曰ク 金蓮灯ヲ挑ゲテ同ジク往クベシ 是ニ於ヲ金蓮復タ回ル
- (3) 柩ノ前ニ一雙頭ノ牡丹灯ヲ懸ケ 灯下ニ一盟器婢子ヲ立ツ 背上ニ二字有リ金蓮ト曰ク
- (4) 是ノ後雲陰之昼月黒之宵 往々ニ生ト女ト手ヲ携ヒテ同ジク行キ一Y 簀双頭ノ牡丹灯ヲ挑ゲテ前導スル 之ニ遇フ者スナハチ重疾ヲ得
- (5) 双明之灯ヲ焼毀シ 九幽之獄ニ押赴ス

金蓮が「牡丹灯記」の怪異の主役を演じているならその金蓮の



〔伽婢子〕（寛文6）魂屋に掛けられた牡丹花の灯籠



〔奇異雑誤〕（貞享4）金蓮の挑げる灯籠



〔夜窓鬼談〕（明治22）飯島氏の婢の携える牡丹花の灯籠



〔阿国町前化粧鏡（文化6）牡丹の灯籠

あるところ必ずあり、しかもその金蓮を前導誘導していることが、右によって判明する。殊に(2)で「金蓮灯ヲ挑ゲテ同ジク往クベシ」とあるのは、これが金蓮と共にあることが必要で金蓮の怪異の何ごとかに「双頭ノ牡丹灯」が係っているからではなからうか。だから道人は禍を避けるために物語は最後でこれをも焼毀しなければならなかったのである。

ところで寡聞にして「牡丹灯」の説明を知らない。それも「双頭牡丹灯」であるが、古くは『奇異雑談』である。

牡丹灯記 牡丹の枝のさきに花二つあひならぶかたちを灯籠にはるなり 是を双頭の牡丹灯といふなり

と、また『奇異雑談』の先蹤かと思われる『漢和希夷』には「牡丹ノ枝ノ頭ニ花ニツ相雙ビタル形ヲ灯籠ニハリタル也」と同趣の説明があり、ついで『靈怪草』（慶安元年、一六四八ころ成）には、

双頭の牡丹灯とて花のかたちにつくりたるとうろ

と簡略になり 翻案作の『伽婢子』（寛文六年）では「美しき牡丹の灯籠」というだけで挿絵にはそれらしき形は残りながら「双頭」の語義はみえない。

挿絵で見るかぎり特定すべきものはないが、『春渚紀聞』には、一つの蒂に二輪の花をつけた双頭牡丹一枝を記し、『洛陽牡丹記』には、牡丹の一種の双頭紅、双頭紫を説明して、「二花皆並蒂而生如鞍子 而不相連属者也」とあるところから、『奇異雑談』や『漢和希夷』の説明は灯籠を蒂にあしらって、これに二輪の花を並べつけたものと見ることが出来る。「伽婢子」以後の挿絵も大方された類するものである。（前頁の挿絵を参照）

ところで『春渚紀聞』でも『洛陽牡丹記』でも「双頭牡丹花」は奇異なるものとしているが、それだけに無気味さが漂うところ

ある。仮りに「双頭」の字義を問題にすれば、のちに喬生の供述にある「両頭蛇」と関係がありはしまいか。この一篇の中で使用する「双頭」と「両頭」の特殊な語は、共にそれが奇異不吉なものであるだけに両者に関係がありはしまいか。

「両頭蛇」を説明した『剪灯新話句解』の注は、

孫叔敖児タリシトキ出テ遊で、両頭ノ蛇ヲ見テ殺シテ之ヲ埋ム 婦リテ泣ク、母其故ヲ問フ 対ヘテ曰ク両頭ノ蛇ヲ見ル者ハ死スト、嚮ニ之ヲ見ル、恐クハ母ヲ去リテ死ヌナリ、母曰ク蛇今イヅクニカ在ル 曰ク他ノ人又見ルコトヲ恐レテ殺シテ之ヲ埋ム 母曰ク陰徳ノ者ハ天報ニ福ヲ以テス汝死ナズ、長ズルニ及ビ楚ノ相トナル

これを「双頭牡丹灯」に転用すれば、それを見る者は必ず禍あつて死ぬことになる。「牡丹灯記」では双頭牡丹灯を挑げて金蓮に前導された喬生、麗に遇う者は必ず重病に罹るというのもこれに付合する。

すると災禍のもととは金蓮の挑げた双頭牡丹灯にあったということになる。その金蓮は頭上に両轡を作ったY轡の女でもあった。Y轡の纏足の女に因んだ金蓮と、それが挑げる双頭牡丹灯の妖麗にして不吉な取り合わせこそ意味がありそうである。かくして孫子が両頭蛇を殺して土中に埋めたように、道人はまた双頭牡丹灯を焼毀することによって人々を災禍から救うことが出来たという物語の結末も見方によっては付合する。

かくして牡丹灯こそ「牡丹灯記」の怪異の実体であった。その昔、「牡丹灯記」に接した林羅山が

鎮明嶺下有喬生 月夜相逢符麗卿
誰道牡丹不成事 元来精鬼在灯檠

と、すでに灯檠すなわち「双頭牡丹灯」こそその精鬼であると詠じていたのは蓋し羅山の慧眼であつたか。慶長五年（一六〇〇）

若冠十八才の羅山であつた。

五

かくして「牡丹灯記」の諷世を金蓮に託すことがあつたとしても、それを無気味な怪談の世界に導いたのが双頭牡丹灯であつたということになる。しかし文学としての「牡丹灯記」は唐代伝奇の流れを汲んでいたのは確かである。瞿佑が「新話」の自序で「古今怪奇之事ヲ以テ剪灯録トナス」と言つたその「古今怪奇之事」とは、呉植の「剪灯新話引」（洪武十八年）によると「其ノ辭則チ伝奇之流」すなわち唐代伝奇を指すものであつた。瞿佑は明らかにそのあたりを意識していたのである。

唐代伝奇の主役が六朝志怪の神仙鬼怪にとつて変わり才子佳人となつたことはたとえば前野直彬氏の言うところであるが、「牡丹灯記」の依拠するところもそこであつた。「牡丹灯記」の原拠が常渚の『靈鬼志』所収の「王元之」よりも、『北夢瑣言』の件の話がより近いことは先述した。『北夢瑣言』の盟器婢子紅英にかえて麗卿と、そしてそれに待す金蓮とにすることで唐代伝奇の才子佳人の物語に近づいたのである。

しかし構想が大凡一致しても『北夢瑣言』に見られなかつた重要な趣向が「牡丹灯記」には二つあつた。ひとつは男が骸骨の女と狎れ親しむ飲昵の場を、隣の老人が目撃すること、もうひとつは二度と女に近づいてはならないという法師の戒めを破つたことから、男は女の棺の中に引き入れられ死を遂げることに、この鬼気迫る二つの場面が『北夢瑣言』にはない。亡者が旅櫬のままに置き去りにされて成仏も出来ず、人をもとめてさまよい歩く女の魂魄が漸く男を得てしばらくのやすらぎを得たものの、やがて男に裏切られる。その男に対する女の悲りと怨みが殺害にまで及ぶ怖

しさが「牡丹灯記」に加えられたのである。この二つの趣向こそ怪談としての最高調の場面を作りあげただけではなく、唐代伝奇の単純な話が、複雑な女の情念を秘めた陰湿な鬼気迫る物語に変わつていったのである。ここに「牡丹灯記」の怪談文学としての成功があり、新しい魅力が生まれたのである。

しかし唐代伝奇に拠りながらも「牡丹灯記」は明らかに瞿佑の創作であつた。それは何よりも瞿佑その人の面かげがここに投影したからである。『新話』には付録として「秋香亭記」と名づける一篇がある。これが瞿佑の自叙伝に類するものではないかと言うのは、同郷の友人凌雲翰の序文である。

他家に嫁いだ幼馴染を忘れられず、その後もひそかに思いつづけるようなロマンチストの「秋香亭記」の主人公は『新話』の艶情物語を読むとき、あるいは作者の半生を語るものではなかつたか。確かにそのようなふしがある。元の至正年間に商という若者がいた。役人の父に従つて蘇州の烏鵲橋に寓居する。その隣には由緒ある楊家があつた。これは商の家とは縁つづきであつて、娘の采々は商とはまたいとこの幼友達であつた。やがて歳月は流れ二人は年ごろの若者と娘に成長し、いつしか思い思われつゝの仲となつていた。

その年も商の家の秋香亭の前庭には桂の花が咲いた。采々は商への熱い思いを碧瑤筆の詩に託して贈つた。商もそれに応えて互に心の内を確かめ合うのであつた。折りしも高郵に張士誠の兵乱が起り、商の一家は兵乱を避けて、各地を転々とするうち、采々の一家も金陵に移つて行つた。こうして十年の時が過ぎ兵乱は収まり、平和の時代となつたが、采々はすでに他家に嫁して子までなしていたのである。采々を忘れることが出来ない商は髪飾りと綿紅を老僕に託し、それとなく采々の氣持を探らせるのであつた。

『牡丹灯記』の喬生は勿論この商でもなければ瞿佑でもない。しかし麗卿のとりこになるロマンチストの喬生やこの商は瞿佑を措いては考えられないのである。

その瞿佑は字を宗吉、存斉と号した。元末明初（一三四一—一四二七）浙江省錢塘の人、「秋香亭記」の張士誠の乱は彼の少年時代であった。若くして学識に秀で、有名な詩人楊鉄崖に認められるなど詩文の才は豊かであったが、官途にはさほど恵まれなかったようである。それでも洪武年間には臨安その他の学官になり、永楽（一四〇二）の初めには周王府の長吏にまでなったが、それも東の間のこと、同六年（一四〇八）には詩禍を蒙り罪に問われて遠く陝西省の保安に十八年もの長い流謫の憂目を見なければならなかったのである。「夙ニ志ノ乖違ヲ念ヒ 旧学ノ荒廃ヲ憐ミ空ニ書シ 黙坐シテ之ヲ長大息ニハス」と叙す『新話』の後序には瞿佑の憂想憤懣を伝えて余りある。詩禍は激しく時勢を諷した詩を作ることがあったからではないかと村上氏は言う。^(注10) 瞿佑のようなロマンチストには時として時勢に激しい憤りを禁じ得ないところがあるからである。

かくして『牡丹灯記』に就けば、前半のあえかな艶情物語と後半の冷徹な冥府物語の世界はあまりにも懸隔がありすぎる。そこに何かしら瞿佑の前半生のロマンと、その後半生の厳しい現実が髣髴とする。『牡丹灯記』の麗卿の中に或いは采々の幻影を追っていたのではなかったか。

六

『新話』はもと『剪灯録』と題した四〇巻（前・後・続・別各十巻）の大部のものであったが、瞿佑の保安流謫の頃にはすでに大方は散佚してしまっていた。ところが肝江の胡子昂が蜀（四川

省）の蒲江の伊になって赴任した時、たまたま書記の田以和の許でそのうちの四巻を贖す機会があった。胡子昂は公務の傍、保安の瞿佑を訪ね、これを示して校訂を乞うたのである。瞿佑はすでに七十五才、旧稿を目のあたりにしたこの老瘦は、その若き日を追憶して、懐いを跋文に識すのであった。

すなわち『新話』の諸篇はいまを去る四十四年、明の太祖の洪武十一年（一三七八）に作られたものであった。その頃は自分もまだ若く精力的であったので、見さかえもなくどんどん書き進めて行ったものだ、と、過ぎし日を感慨深く語るのであった。

こうして胡子昂によって危く散佚を免れた『剪灯録』の一部は、数奇な運命をたどりながら『剪灯新話』となって再び世に出ることになる。永楽十九年（一四二一）のことであった。その後正統七年（一四四一）『新話』は怪異に仮託した事実無根の話、それが人心を惑乱するとして禁書処分となり、爾来嘉靖年間（一五二二—一五六六）の初め漸く法禁が緩んだことで復刊されて、いくつかの刊本が世に出ることになる。

本邦への渡来は、その嘉靖年間のことであった。沢田瑞穂氏^(注11)によれば五山の禅僧の策彦周良の入明記『策彦和尚初渡集』の天文九年（一五四〇）十月十五日に『剪灯新話』および『剪灯余話』を寧波で購った旨の記述があるという。するとこの策彦は翌年帰朝したから、その際に『新話』を携い帰ったことにでもなろうか。それが五山の禅林で翫されたことは、これも五山の禅僧周麟が文明十四年（一四八二）秋、『新話』の一篇を読んだの「読鑑湖夜冷記」の一詩が『翰林葫芦集』にあるからである。新渡の『新話』はまず五山の禅僧たちの中で翫ばれていたのである。

（注1）『全訳剪灯新話』（昭29・中央公論社）の序。

（注2）『唐代小説の研究』（昭53・笠間書院）のうち「唐代小説と剪

灯新話」。

- (注3) 『南史、齊東昏侯紀』に「鑿_レ金為_二蓮華_一以帖_レ地 令潘妃行_二其上_一」曰 此步步生_二蓮花_一也」
- (注4) 『百物語と牡丹灯籠怪談』(叢書江戸文庫『百物語怪談集成』昭62・国書刊行会)の月報。
- (注5) 『鬼趣談義』(昭51・国書刊行会)のうち「土偶妖異記」。
- (注6) 注2と同じ。
- (注7) 顧炎武『日知錄余卷』卷四、禁小説の正統七年(一四四一)

二月辛未の条(近藤春雄氏『唐代小説の研究』)

- (注8) 注2と同じ。
- (注9) 『中国小説史考』(昭50・秋山書店)
- (注10) 『全訳剪灯新話』(昭29・中央公論社)の「剪灯新話と江戸文芸」。
- (注11) 『剪灯新話の舶載年代』(中国文学 月報35・昭13)。および『日本古典文学辞典』(岩波書店)の「剪灯新話」の項。